

うれしかったこと

二週間に一回マットの交換に行っているベーカーリーに高校を卒業した少年が就職してきました。□数の少ない、優しすぎるような印象でした。私と同じ県の出身とわかり、それから言葉を交わすようになりました。自分も若いころレストランの厨房にいたことがあるので、彼のおかれた環境がわかります。店に行くたびに、「元気でやってる?」「友だちできたか」「おふくろさんに電話してるか」などと声をかけました。

それから十二年たったこの春。交換したマットを車にしまっていると彼が出てきて「故郷に帰ることになりました」。お嫁さんをもらって、二人で店を開くというのです。来たばかりの頃、励ましてもらってうれしかったと頭をさげます。そして、「いつか店を見に来てください」と自分が焼いたケーキを渡されました。仕事を続けてきて、こんなに嬉しかったのは初めてでした――。

横浜でダスキンのお仕事をされている五十代の方から聞いたお話です。「彼が成長していく過程を思い出し、おかげで自分の人生を豊かにしてもらった気持ちです」、そう云っていました。

株式会社ダスキン会長

伊東英幸

写真・市谷 健「んとねえ、みんなで来たの」



喜びのタネまき新聞

読む人の幸せを心に願って作る

no.493

ふるさとの暮らし④ 「夜空の星」

都会ではなかなか見られなくなった星空。ふるさとに帰り、夜空を見上げると、またたく星ぼしに出会えます。



僕が夜空の星というものに初めて感動したのは、五、六歳の頃である。

離れの便所小屋に用を足しに行くと、いつの間にか隣に来ていた六つ上の兄が、「あれが銀河だよ」と少し誇らしげに教えてくれた。「えっ?」と思ってよく見たら、すぐ目の前のやぶ山の暗闇の空に、星の集団がムチムチッとすき間なくまぶしく光っていた。遠くでは渦巻き、ある星は流れるように走り回り、全体が「ウォー」と音に

ならない轟音^{こうおん}をたてて輝いている。

それまで星を見たことがあったにしても、気にもとめなかったのだが、兄から言われて初めて「へー、この世にこんなものがあつたのか」と子ども心にも生意気に驚いた。それが、銀河の中にいるわが地球から見た「銀河」の姿だとわかったのは、ずっと後のおとなになってからのことである。

当時は電気もなく(電気がわが村に来たのは、小学生のときだった)、もちろん街灯もなく、月夜

以外は夜になると何も見えない。本当の真つ暗闇。

そのせいなのか、あるいは子どもの時は何もかも大きく見えるのか、星の大きさがぼた餅くらいに見えた。

あれから半世紀以上過ぎた今、ふるさとに帰り、外に出てなんとなく夜空を眺めると、あのとき見たであろう星たちが、「あら、いつ来たの?」と言うように、パチパチ、パチパチとウインクしながら輝いている。

絵と文 版画家 中野洋一

版画家・陶彫家。鹿児島県生まれ。故郷の風物等をテーマに木版画や陶彫を制作。1995年には朝日新聞日曜版のカットを連載。オランダ国際版画ビエンナーレ展入選など国際的にも活躍。

チョコとナッツを使って「ブラウニー」

チョコプレート好きにはたまらない「ブラウニー」。お店ではよく目にするけど、自分で作るには難しそう?と思ったら、意外や意外、材料もシンプルで目からウロコの簡単おやつ。夏休みにお子様と一緒に作ってみては!



お料理研究家 こいけりえ

おやつの時間 簡単、美味しい楽ラクレシピ



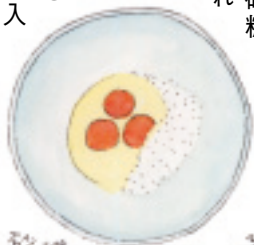
◎作り方(20cm×20cmの型で約10個分)
●生地を作る

ピーカンナッツまたはアーモンド80gを160℃のオーブンで10分くらいローストし、粗熱をとってから細かく刻んでおく。バターチョコプレート80gも細かく刻む。

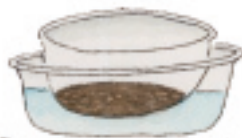
無塩バター100gは小さめに切って室温に戻しておく。刻んだチョコプレートと無塩バターをボウルに入れて、湯煎にかけて溶かす。

別のボウルにLサイズの卵3個と砂糖100gを入れて、砂糖がしっかりと溶けるまで混ぜ合わせる。そこへ、湯煎で溶かしたチョコプレートを入れてさらに混ぜ合わせる。

すつかり混ぜたら、その中に、薄力粉130g、ベーキングパウダー小さじ1と塩少々を、ふるいにかけながら加える。粉っぽさがなくなるようにしっかりと混ぜ合わせ、ローストしたピーカンナッツを加えたら、さらにむらなく混ぜる。



砂糖がしっかりと溶けるまで混ぜ合わせる



70℃くらいの湯にボウルごとつけて溶かす

●オーブンで焼く

ひたすら混ぜる事が大切で、仕上げにサラダ油小さじ1を加えて最後にしっかりと混ぜてなじませるのがコツ。クッキングシートを敷いた型に流し入れて、表面を平らにする。

180℃に予熱しておいたオーブンで30分くらい焼く。焼きあがり心配な場合は、中央を竹串で刺してみる。焼き上がりしたら、お好みの大きさに切って出来上がり。予熱で火が入りすぎると生地が硬くなるので、完成したらすぐにオーブンから出すこと。



お好みの大きさに切るとは、少し柔らかい状態に焼く



みてもらおう!

見てうれし、見せてうれし、この写真。わたしの出番の1枚を送ってください。



「どーもっ、お元気?」
滋賀県大津市 松崎みどり



「いやあ、ラクにして、ラクに♪」
大阪府寝屋川市 東山めぐみ



「久しぶりだから、
てれちゃって、さ」
北海道小樽市 阿部恵美子

家族や友だちにしか撮れないステキな笑顔、みんなに見てもらいたいわたし好みの1枚。もちろんかわいいペットも撮れたら送ってください。お待ちしております!
(詳細は7ページ)



お仕事用がまぐちです。ペンチみたいなのは口金に布を押し込むお道具。



「ぽんぽん」としてたら

と

好きな色と形が

「むおおお、

かわいいです」

しつとりと落ち着いた清々しい風情の工房である。賀茂川沿いの小数歩入ったところの小さなおうちで、生徒6人を迎えて11時に教室は始まった。ご本人が、「しあわせなきもちで工房に向かいます。今までになかった時間。今ではもう、大切な時間です」とヒソカに大満足の借家は、一目で気に入っただけあって、庭の一本一草も大切にされている。

今日は文庫本とペンが入るサイズを作る。

カットした布が机にぱ

っと置かれると「あー、

かわいい！」皆からため

息まじりの歓声があが

った。「皆で、作る前に

ワクワクして布を選ぶ。

それが一番楽しい時間

なので、私も朝一で用

意するのです」と先生。

思い思いの布を選ぶ

と手縫いの時間。本返

し縫いで一針一針ふち

を縫う。しばし無言の

時が流れる。

「先生！糸目がずれて

ますう」

「大丈夫。ひっくり返

したら忘れます」

言葉通り、表に返し

て自分だけの配色に嬉しそう。

「ここで心に栄養を。

持続できますもの」と

先生。

がまぐち作りって、

緊張↓満足↓緊張の繰

り返しのステップがあっ

て、そこがいいのかも。

特に最後の口金をつけ

る時の緊張感がひきし

まります。

「できんかったら、どー

しよ！」

でもほんとに大丈夫。

できあがってばち

んとした瞬間に、ちょ

っとの心配や不出来は

忘れてしまう。これが

はまっちゃう秘密なん

でしょうね。



あら、

気分すつきり！

がまぐち作りに夢中です

京都「カクカメ」の亀田美樹さん



がまぐちって財布だけじゃない。化粧ポーチ？それとも何をいれようかな？

口金の「ばちん」という音が懐かしいがまぐち。数年前からモダンな和柄が若い女性を中心に人気が出て、街の店にも並ぶように…。その発信地の一つ、京都のカクカメさんをお訪ねした。教室はいつも盛況。一点モノにこだわる男女が習いに来る魅力はなに？

携帯や小物入れもある。中央がカーブした長いものは三味線のバチ用「自分のオーダーなんです」と亀田さん。下は文庫本用。



「がまぐち職人」亀田美樹さんが、京おんなの雰囲気だが大阪生まれ。短大で服飾を学び、アパレルへ。
 「ほかに織物屋さんにも行った。糸の色にひかれて。ここへ来る道やっただんだなあ…」
 8年ほど前、百万遍知恩寺の手づくり市で、本人曰く「ほとんど自己流」でがまぐちを出展。懐かしいのにアートっぽい亀田流が注目を集め、

「みんなが、がまぐち、がまぐち、って」
 難しい所を一つ一つ越え、こだわりと発見をくり返し、試行錯誤をするうち、はっと気がつくこと退社して「がまぐち職人」になつてい

とそっくりな気もする。

そのカクカメさんに惹かれて、少人数でしっかり学べる教室は、募集するとあつという間に満員となる。古着好きやご夫婦一緒の方もいて、年齢は学生から50代と幅が広い。「もう着れへんけど、お母さんにもらった服やから」と布を持ち込む方のオーダーにも応じている。

この工房は、いつもとは別の幸せな楽しい時間が流れるおうちだ。京都、ならではこそ、と思う。

「みんなが、がまぐち、がまぐち、って」
 難しい所を一つ一つ越え、こだわりと発見をくり返し、試行錯誤をするうち、はっと気がつくこと退社して「がまぐち職人」になつてい



「色選びはいつもでぎどきします」と生徒さん。はつらつとした配色！





母さん

秋田県小坂町 武石幸子

母は一昨年に92歳で亡くなりました。働き者で、1人で8人の子供を育てた元氣な母でした。父はお酒が好きで、いつも酔っ払って会社から帰宅。母は大雨で畑に出られないと、穴があき古くなった服でエプロンやザブトンカバー、袋を作りました。冬には雪かきしてから編み物。

「手足がしゃつこいべ？ 風邪ひくな」と寒い野菜売場に勤める私を心配し、セーターで靴下や手袋を作ってくれた母です。私はその靴下を何十年も愛用していました。いつも氣遣ってくれた母を思うと、つくづくありがたいです。

今は週1度、母が大好きだったカボチャなどを持って、お墓に会いに行きます。寂しいけれど、母はいつも空から見守っていてくれると思い、元氣に暮らしています。母さん、天国ではあんまり無理して働いたらだめだよ！

——「お母さん、ありがとう！——



友だち

福島市 添田佳奈

中学3年の時、私には毎日クラスで一緒にいる友だちがいました。その子は私のことを、「唯一の友だち。大好き」と言ってくれました。

仲良くて楽しくて、ケンカもよくする二人でしたが、ちょっとワガママな所に少し嫌気もさしてきた頃『受験を控えた3年生に後輩からの質問』という恒例の用紙が回ってきました。

その中に「友だちと長続きするコツは？」という質問があり、私は「良い所も悪い所も受けとめる事」と記入しました。一方、その子の回答欄には「友だちを大切に思う事」の一言。

はっとしました。私って大切にされているんだと気付かされました。今まで、ごめんね…。大切“って気持ちが一番だよね。

あれから10年。今では、友だちとその子供と、よく一緒に遊んでいます。大切な友です。

——「これからもう、よのつぐねー」



クラクション

三重県鈴鹿市 佐野由美子

いつも車で通る十字路は狭いうえに、行ったもの勝ち。みんな我先に通ろうとします。そつと車の鼻先を出すと、『ブッブッ』と派手にクラクションを鳴らされてしまう始末です。

ところが、ある日、いつものようにそつと車の鼻先を出すと、右手からやってきた車も、そつと止まりました。こつちへ曲がりたいたいのかなと思ひ躊躇していると、『お先にどうぞ』と運転手の方のジェスチャー。『ありがとうございます！』と頭を下げ、『ブッ』と感謝のクラクション。すると、相手の方も『ブッ』と返してくれました。いつもは『どけどけ！』としか聞こえないクラクションも、こんなふうに『ありがとう』『どういたしまして』にも使えるんですよ。

——「うれしくなっちゃった日。」



姪から姪へ

千葉県袖ヶ浦市 有坂ふじみ

着付けを習い始めた姪のために、何か練習用にとタンスを探すと、30年も前、私がまだ高校生の時、家庭科の授業で縫ったアンサンブルが出てきました。制作は休み中の宿題で、提出日に間に合いそうもなく、私は同じ高校出身で裁縫の得意だった叔母に泣きついて助けてもらいました。

偶然、私の先生が叔母の先生でもありました。「あなたの叔母さんは本当に器用だったよ」と聞き誇らしかったのですが、もちろん先生には内緒でした。その着物を手際よく着て、「かわいい！ ホントにもらうていいの？」

叔母から姪の私へ、そしてまた姪へ。そのいきさつを語ると、なおさら感激していました。

「大切に着るね、おばちゃん」

思い出の着物が、いちばん素敵な形で引き継がれたことがうれしく、紺地に赤と白の緋あざが、華奢な姪によく似合っていました。

——「思い出も引き継がれて……」

きらいな人になんぞ愛を

大げさな言い方ですが、さとりを得ました。きらいだ、と思う人になんぞ愛をそそぎましょう。人を愛することは自分がしあわせになることです。正直なところ、「愛する」とは、どういふことか、分らずに悩みました。ところが、あるとき

「相手の人をうらみ、憎み、信じる」ことが出来なくなったら、自分自身が、みじめになる」ことを、気づかせてもらったのです。

鈴木清一



長野市 上原裕美

「初ふんすい、大コーファン」

●投稿には、名前、年齢、職業、住所、電話番号、現在ご利用のダスキンの店名をお忘れなく。紙面やホームページで紹介させていただいた原稿や写真にはお礼をさせていただきます。

●送り先

〒163-0223
東京都新宿区西新宿2丁目6番1号
新宿住友ビル23階(私書箱47号)
ダスキン「喜びのタネまき新聞」編集室
電話 03(5909)6703
e-mail: koho4@mail.duskin.co.jp

無料

おそうじ相談
実施中!

ダスキンコールセンター
平日の9:00~17:00
0120-100-100

- 2ページの中野洋一さんのアトリエ
〒896-1301 鹿児島県薩摩川内市鹿島町蘭牟田2131-203
電話: 09969-4-2763
- 4-5ページの亀田美樹さんの工房「カクカメ」
〒603-8133 京都府京都市北区出雲路松ノ下町9
電話&FAX: 075-414-0175
ホームページ: <http://homepage2.nifty.com/kakukame/>



より楽しく

愛知県刈谷市 江坂すま子

ニュージーランドのクライストチャーチに行ってきました。街の主な交通手段は路線バスです。通学、通勤、買い物と、老いも若きも全ての市民が利用しています。

そこで出会ったビックリ光景、二つ。

朝、バスが停留所に近づいて、窓の外に老いた夫婦や障害のある人の姿が見えると、高校生1人、2人がサッと席を立ちます。後ろの席に移動するのです。ごく、ごく自然に。

もう一つは、誰もが皆、自分が降りる場所が来ると、ドライバート「サンキュー」と挨拶をかわし合って降りていきます。

日本のようなラッシュはないので可能なのですが、早速私も取り入れています。

——心のはずむ「ありがとう」をあなたに。



休みの日

岩手県一関市 菅原幸恵

3歳児の母でパートの仕事をしています。仕事を始める前は、子どもと一緒に散歩をしたり、シャボン玉で遊んだり、ゆったりと有意義に過ごしておりました。しかし仕事を始めてからというもの、時間があっても気持ちの余裕がなく、子どももしっかり向き合うことがなくなってしまうなあと感じている毎日です。

先日の休みの日に言われました。

「ママ、今日はお休みの日だからゆっくり遊べるね！休みまでママと遊ぶの待ってたんだよ」小さな子が親の私に気を遣ってくれていたのだと思うと、なんだか涙が出てしまいました。休みの日にはしっかりと子どもと向き合い、たくさん遊んであげたいと思いました。

——子どもには、いつだってウルウルです。

♡は～とふるボイス②♡

～音楽のように受けとめる～

名古屋の金山駅で愛の輪運動のイベントをお手伝いした時のこと。構内に響き渡る美しいフルートの音色に、人々がふっと足をとめて聴きっていました。演奏したダスキン障害者リーダー育成海外研修派遣生「AYaKoグループ」は視覚に障害のある音楽家。彼らが奏でる美しいメロディを、誰もが自然に受けとめ感動したのではないのでしょうか。皆さんのあたたかい拍手を聞きながら思いました。バリアフリーに大切なのは、音楽のように障害のある方をナチュラルに受けとめる私たちの心だと。

●愛知県三好町 佐藤律子



このコーナーについては、
広げよう愛の輪運動基金まで。

☎06-6821-5270 HP (<http://www.ainowa.jp/>)

